

に埋納（埋遷）する風習がある。これは、それを女性がまたぐことにより、子供の魂を胎内に転入させ、新しい生命のはぐくみを祈る妊娠呪術とする意見がある。

また東北の一部で発生した抜歯の風習は成人式の通過儀礼と考える意見もあり、縄文後期には九州でも行われるようになっていた。

狩猟儀礼については、成人男性の墓坑に限って石鏃・槍先の出土が見られることやイルカやトドの頭骨の取り扱い方などの例から、狩猟についても何らかの意味づけと儀礼があったのではないかと考えも出されている。

二 京都・行橋地方の縄文時代

京都・行橋地方で現在まで確認されている縄文遺跡は一八遺跡であるが、ほかに土器や石器が地上で採集された箇所を含めると二〇か所は超えるものと思われる。その中で発掘調査が行われたのは、浄土院遺跡（苅田町）、節丸西遺跡・川ノ上遺跡（以上豊津町）、タカデ遺跡・寺門遺跡・自在丸遺跡・五反田遺跡・清四郎遺跡（以上犀川町）であるが、浄土院遺跡・節丸遺跡を除けば若干の土器片や石器類の出土を見るのみで、遺跡の全体像はつかめていない。（第21図参照）

この地方の縄文時代の遺跡分布を見ると、遺物の散布地を含めて砂丘上・河岸段丘上・丘陵上、台地先端部・低地となっているが、概して水はけのよい場所に位置している。さらに遺跡全体について言えることは河川や海に近く、行動領域の範囲内に豊かな山地が控えていることである。

全時期を通じて狩猟と採集が中心の生活であってみれば、一方では淡水・汽水・海水産の魚貝類、他方ではイノシシやシカなどの獣類・鳥類・木の実などの得やすい場所に住居が営まれ、集落が形成されたものであろう。

節丸西遺跡（後期）からは打製石鏃・石匙・スクレイパー・石錘・敲石・石皿・台石など狩猟・漁撈・解体処理・調理用具（木の実などの）が揃って出土している。（第15図参照）

その中で特異なのは小豆田遺跡・天生田遺跡（行橋市）などの川底遺跡であるが、もともと集落近くに流水があり、ある時期になって洪水などで流路が変わり埋没したものと考えられる。同じことは黒田遺跡（勝山町）についても言え、住居跡内に多くの流木が見られたという。

次に遺跡を時期的に見ると、ごく最近までは中期以降、特に後・晩期の遺跡の出土が多かった。しかし、この地方での広範な圃場整備が進められそれに伴う発掘調査の多くなる中で、寺門遺跡・自在丸遺跡（犀川町）からはまだ出土例の少ない縄文早期の押型文土器片が出土しており、この地方でもこの時代の早い時期から人々が各地域に住み始め集落の形成を始めていたことがわかりつつある。今後は各地域でもさらに古い時期の遺跡の発見が見込まれる。

前出の浄土院遺跡・黒田遺跡・節丸西遺跡からは扁平打製石斧が出土しているが、この石器については棒の先に装着されて掘り起こし具としての役割も想定され、縄文農耕を考えさせる石器と考えられているが、これら三遺跡とともに縄文後・晩期の遺跡であり、このころからの農耕栽培の始まりを印象づける。（第15・17図参照）

住居については、節丸西遺跡のみで二四軒の住居跡が発掘されている

が、このうち一四軒は平面プランが円形住居であり、他は方形に近いものと不明確なものそれぞれ五軒となっている。地表を円形に掘りくぼめて掘立柱を立て草葺きにした竪穴式住居で、中心に炉を設けた縄文時代の一般的な住居である。しかし、他の遺跡を含めて当時どのような集落が形成されていたのかこの地方についてはまだ解明できる段階ではない。(第22表・第89図参照)

三 犀川町周辺の主な縄文時代遺跡

(一) 節丸西遺跡(豊津町節丸)

一 被川中流域左岸の高さ約三メートルの低い河岸段丘上に位置する。圃場整備に伴う事前調査で発見され、平成元年度に発掘調査が行われた。発掘された遺構は、住居跡二四軒、土壇、埋甕であるが、柱穴からすれば住居跡の数はまだ増えるものと考えられている。

住居跡のうち円形プランのもの一四軒、方形に近いもの・不明確なもの一〇軒であったが、そのうち地床炉のみをもつもの七軒、石組炉と地床炉をもつもの一軒、土器炉をもつもの一軒、石組炉のみをもつもの二軒である。出土遺跡は土器・石器類が中心であるが、土器型式は鐘崎式・北久根山式・西平式があり、縄文時代の後期後半の時期が考えられている。(第15・16図参照)(豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」一九九〇)

(二) 浄土院遺跡(苅田町浄土院)

高城山南麓に見られる扇状地状地形の先端部低地に位置する。南方約

七〇メートルのところには小波瀬川が流れて周防灘に注ぐ。昭和三十一年(一九五六)の緊急調査の際には、水田下約五〇メートルのところから縄文時代後期の方形竪穴式の敷石住居跡と考えられるものを確認したほか鐘崎式・西平式土器などが出土している。

次に昭和四十七年の緊急調査では、鐘崎式・西平式土器のほか磨製石斧・打製石斧・石鏃・敲石・石皿・スクレイパー・石包丁形石器などが出土している。また西平式土器の甕棺(口径三八センチ・器高三八センチ)が出土し、中に成人女性の火葬骨が残っていた。遺跡は縄文時代後期中葉から後半に及ぶもので、石器類の組み合わせから縄文農耕論に有利な資料を加えることになったとされる。また「縄文人骨の火葬例は数少ない葬例で、洗骨葬とともに改葬の新事例として注目される」と調査者は述べている。(第17図参照)(浄土院遺跡調査団「浄土院遺跡調査概報」一九七二)

(三) 川ノ上遺跡(豊津町徳永)

一 被川の右岸で標高約三〇メートルの河岸段丘の辺縁部に位置する。国道十号椎田バイパスの建設に先立ち昭和六十四年(一九八九)から発掘調査が行われ、弥生時代の遺跡を中心に縄文時代・古墳時代・歴史時代の遺跡が出土した。このうち縄文時代の遺物は打製石斧・打製石鏃などがあるが、詳しい遺物の考察は今後報告書の中でなされよう。

(四) 黒田(種生)遺跡(勝山町上黒田)

勝山平野の南西部で、旧長峽川の河道と考えられる帯状の低地辺縁部に位置する。低湿水田の排水施設の工事中に、水田下約一・二メートルで発見